「チャイナスタンダード」の外をながめて：139～141. 2005

フィールド・ノート

「チャイナスタンダード」の外をながめて

小林　朝美

はじめに

「チャイナスタンダード」という用語があるとしたら、その基準になるのは、なんだろうか。「グローバルスタンダード」は、「世界標準」とはいうものの、結局は欧米、誤解を恐れずに言うならば、アメリカを基準としている。では「中国標準」ならば、どうか。

私は2002年11月から2005年３月までを、中国四川省で過ごした。中国に留学したはずだったが、日が経つにつれ、また中国各地に留学する友人と話すごとに、「中国に留学した」というより、「四川に留学した」のだと思うようになった。同じ中国国内で留学生活をしているにもかかわらず、話がかみ合わないことが多々あったからだ。さらに、私の研究対象が少数民族であるチベット族であったため、この乖離感はいっそう深いものとなった。

ここでは、「中国標準」を外れた私の留学生活をとおして、標準化できない中国の一面を描写してみたいと思う。

1．中国の中の四川

四川省は、北京から飛行機で約２時間半（およそ成田－上海間の飛行時間に相当）、列車なら28時間ほど内陸に入った中国西南部に位置する。西隣はチベットである。歴史的には、三国志で活躍した劉備や諸葛孔明率いる蜀の国があったことで名高い。また省内には、九寨溝や峨眉山といった世界遺産がある。日常言語は中国語の四川方言（四川語）、もしくは四川標準語（四川語なまりの標準語）である。教育やメディアの普及により、人々は標準語をほぼ解するが、いわゆる標準語（普通語）をきちんと操れるのは、学生などほんの一部に限られる。よって、四川で暮らすには、標準語だけでは不自由で、ある程度の四川語の聞き取り力が必要である。最も標準的な中国語を話すと言われる黒龍江省で中国語を2年間学んだ友人は、まず成都空港でタクシー運転手と意思疎通ができず、四川旅行中も非常に苦労し、すっかり自信をなくして帰途についてしまった。一方、彼の中国語を聞いた私は、四川人が標準語だと言い張るそれが、またそれを聞いて身についた自分の中国語が、紛れもなく四川標準語であることを、知るに至った。どおりで、四川のどこに行っても、ほとんど支障なく過ごせたわけである。

もう１つ、情報通信の差も大きい。私は留学中、四川大学の留学生寮で生活した。寮内ではインターネットが接続できたが、使用には困難を極めた。「ある」と「使える」は別問題なのだ。今使えても５分後の保障はない。また、今使えなければいつ使えるか誰にもわからない。さらに中国には情報規制がある。SARS 問題はその最たる例である。私が最初に SARS の発生を知ったのは、韓国人留学生からだった。その後、公的に報道されるようになったが、北京や香港で SARS という悪い風邪が流行っている、程度だったように思う。そもそも、この SARS 問題は中国当局の情報隠蔽など問題が多かった。だがそれ以前に、四川人にとって、沿岸部のニュースは国外ニ

ュースに等しいのではなかろうか。四川大学で立ち入り規制など具体的対策がとられたのは、私が一時的に帰国した後の2003年4月になってからと聞いている。供給難だったはずのマスクは、イトーヨーカドーでは売っていたらしいが、つけている人はほとんど見られなかったという。対する沿岸部では、この頃はすでに大騒ぎで、空港などでの体温確認が行なわれていた。「中国では」という言葉の示す実際の範囲が、いかに曖昧であるかを実感した１コマであった。

2．四川の中のチベット

私の研究テーマは少数民族政策、とりわけチベット政策についてである。これは、多民族国家のあり方を考える上で、非常に興味深いものである。しかし中国当局は、少数民族問題は国家分裂の導火線になる可能性が高いと考えており、中国国内でこのテーマを研究することは制約が大きい。よって、現地では教育および宗教とチベット社会との関係について見聞することに主眼をおき、その一環として、四川省および青海省のチベット族自治州で調査を行なった。ここでは、四川省甘孜（カンゼ）チベット族自治州の最奥地、徳格（デルゲ）の様子を紹介したい。そこは、漢族とは攻防を繰り返し、中央チベットのラサ政府とは一線を画しながら、チベット仏教の一大拠点として地元豪族によって繁栄してきた地域である。

四川にはチベット族の自治区域が３ヶ所ある。アバチベット族キョウ族自治州、甘孜チベット族自治州、木里（ムリ）チベット族自治県である。チベットの伝統的な地域概念では、チベットをウ・ツァン（ほぼチベット自治区の全体）、カム（自治区東部と金沙江以東の四川省の一部）、アムド（青海省および甘粛省の一部）の３つの地域にわける。甘孜州は、この中のカムの中心である。カムのチベット人はカンパと呼ばれ、勇猛果敢なことで知られる。成都から、カムの入り口である康定までは366km（定期バスで約９時間）、チベット自治区に接する徳格までは953km（約一泊二日）の行程である。

まず、康定から徳格行きのバスに乗ると、そこはすでにチベット世界だった。康定は漢族が半数を占めるが、最奥の徳格に行くのは、基本的に現地在住のチベット人であり、車内共通語はチベット語だった。発車してしばらくすると、チベット老僧が私を指して「この子は中国人か？」と周囲のチベット人に聞いてきた。「違う。日本人です」と私がチベット語で答えると、車内の全員に凝視され、その後は彼らに守られて徳格入りすることとなった。もちろん会話は四川語が８割であったが、峠を越える時には旅の安全を祈願して読経がはじまり、ルンタという祈祷紙をまく、というチベットの日常を間近で見ることができた。徳格では、車内で仲良くなったチベット人に寺院を案内してもらい、また彼の家にも招待された。彼は私に寺院内での作法を教え、僧侶に頼んで厄除けの聖水（?）を飲ませてくれたりした。いわば、「チベット人の日常」を体験させてくれたのである。徳格は四川語がかなり通じ、料理も四川風なものが多い。しかし、確かに、彼らの生活習慣には「チベットスタンダード」が存在する。そしてそれは「中国標準」とは別基準のものであることを、ここで身をもって知った。だが、チベット式の彼の家には、大型カラオケが鎮座し、ハリウッド映画のDVDが山になっていた。そのカラオケで歌うのは、いつも鼻歌で歌っているチベット民謡である。１つの世界に多くのスタンダードが共存するのが、むしろ現実であることも、ここではっきりと認

識するに至った。

3．成都の中のチベット

成都市内には「チベット街」ともいうべき地区がある。チベット学部を有する西南民族大学周辺である。聞くところでは、この周辺に居住するチベット族の多くは、甘孜自治州出身者だという。ここでは、チベットの民族用品店が軒を並べ、エンジ色の袈裟を着たチベット僧や民族衣装を着たチベット女性、浅黒い肌と大きな目そしてウエーブがかった黒髪をしたチベット人が主流となる。迷い込んだ旅行者にさえ、ここの主人がだれであるか、簡単に見当がつくだろう。道を一本隔てただけで、漢族社会の成都とは異なるチベット人の生活がここにあることを実感させる。私はこの地域に週２～３回の割合で通った。その主たる目的は、西南民族大学のチベット人学生と交流をもつことであった。ここで体得した実践的チベット語により、徳格では非常に有意義な経験ができた。またチベットネットワークの存在と強さを知ることもできた。私が徳格に行くにあたり、彼らは交通手段や現地情報をあれこれ調べてくれた。「実は違う」ことが多いからである。印刷所のおじさんは「峠で必ず必要になるから」と、先に述べたルンタを持たせてくれた。実際、それは大いに役に立った。チベット世界の末端がこの一角に続いていることを、改めて感じた。

同時に、ここでもうひとつの現実を記しておきたい。それは、チベット人であることを盾にした犯罪が多いことである。つまり、チベット人とモメゴトをおこすと、かえって処理が面倒なため、公安が目をつぶるのである。チベット人による泥棒、ひったくり、ケンカのふっかけなどが横行し、夜間は特に注意が必要である。もうひとつの「チベット基準」が、ここにある。

おわりに

冒頭で、私は「チャイナスタンダード」について提起した。そもそも、このような用語は存在しないが、「グローバルスタンダード」に則して考えると、それは、中国沿岸部の状況や漢族文化が基準となろう。そして、中国当局の政治は、それを暗黙の了解としているように思える。確かに、一国の運営に際して、スタンダードの利便性は高い。多民族国家ならば、なおのことである。しかし、「標準」とは、「平均」ではなく、時に「権力をもつ最先端」を意味する。民族問題をはじめとする、様々な格差の問題の根底には、暗にこの「標準」感覚が潜んでいるように思う。

それぞれの世界には、それぞれの「標準」が存在する。そして、周囲のそれと、共存・反目しつつバランスをとっているのが現実の姿である。多くの標準を一元化するのでなく、各標準をいかに共存させるかが、多民族国家の課題ではないだろうか。